

大和国家の成立と南九州

ID10389 黒岩 伸一

この以下の文は、私の実家 鹿児島大隅町岩川の郷土史「大隅町誌」の中から、抜粋したものです。

一. 大和国家の成立と南九州

朝鮮半島で二世紀頃から南鮮の三韓があった。(馬韓・辰韓・弁韓)。北鮮では、紀元前一世紀南満に起った高句麗が南下して、四世紀初楽浪郡を滅ぼし平壤に都した。更に南鮮には四世紀頃百済(馬韓)新羅(辰韓)が成立し、弁韓は日本の支配地任那となって来た。

日本では三世紀以後国土統一事業が進み、近畿の大和地方に早くから大陸の文化が這入り有力な支配者が現われ、三・四世紀の頃は天皇を中心として大和国家の統一ができあがった。中央には国土統一事業を助けた豪族や、しだいに天皇の支配下に這入った豪族を中心として大和朝廷が作られ、大和国家の中心となった。朝廷に服属した地方の豪族たちは国造・県主に任ぜられて地方の農民を支配した。朝廷は之等の田地の開発をなし屯倉を建て、収穫物を納め財源にした。

この大和朝廷は任那の日本府を根拠に四世紀から五世紀にかけて朝鮮半島に進出し百済を服属させ新羅を討ち高句麗にも勢力を伸ばした。この当時の盛んな国力を示す応神天皇・仁徳天皇陵の壮大さは余りにも有名である。

さてこの時代の南九州の人々は神代時代は熊襲、歴史時代では隼人といわれていた。豊後国、肥前国、筑前国、肥後国等九州諸国風土記によれば、球磨贈於、玖磨嚙啖域は球磨嚙啖という地名が出て来る。

一説によると肥人が山の隈(山間・谷間)に住し、多少の旧俗を存して民族的に区別せられ乍らも、よく優勢の民族と接触を保って生存したのに対し、依然原始的の俗を遺して主として狩猟によって生活するようなものは更に退いて山上の高所を求め、ここに住居の地を定めたのであろう。これがいわゆる山人であり、隈人に対する襲人で、山岳の重畳した高所即ち山の背に住んでいた人々のことであらう。「ソ人」の名は日向国風土記の中に日向国嚙啖郡が出て釈日本紀卷十、述義六の熊襲の条に「今日日向国嚙啖郡」とあり、現在の嚙啖郡に遺っているが、前途の球磨と嚙啖との文字を重ねて「球磨嚙啖」というわけである。

さて球磨嚙啖は日本書紀には熊襲国とあり、古事記には熊曾国となっている。

処で大隅町の古代は大隅国、薩摩国と別れる以前は日向国に属していた。

1 日向国

日向国の日向の名号由来は「景行天皇の十七年天皇熊襲を親征して此の国に至り給う。子湯県に幸して内襲(西都市三宅附近)小野に遊び東方を望みそなして左右に謂って宣り給わく「此の国は直ちに日の出ずる方へ向へり」と、故にその国を号して日向というなり」とある。異説に日向国風土記には天孫降臨時から日向国といったと書かれているがいずれも伝説と考えられる。

日向の国号の始まる以前は何と呼んだか明らかでない。日向五郡八院旧天集に挙げられた旧説によると「日向者、大隅、薩摩之三州也。・・・中略・・・日向国謂熊襲国」、とある。これによると景行天皇の十七年二月までは日薩隅を合わせて熊襲国と呼び景行天皇の日向行幸後日薩隅を合わせて日向国と呼んだものと解せられる。

日向の国名が初めて見えるのは文武天皇二年（六九八）で薩摩・大隅を含んでいる。大宝二年（七〇二）四月筑紫七国（火、筑、豊の前後と日向）のことが出てくる。

後述のように大宝三年八月薩摩国設置され、和銅六年（七一三）四月大隅国が日向国より四郡を割き置かれた。

2 日向の駒

東大江上教授の騎馬民族上陸説にもあるように天孫族の騎馬渡来は所詮神代時代（四世紀）からのものであろう。日向馬もその頃からのものと考えられる。

日向（日向大隅を含む）は上代名馬の産地で日向馬に関する古記録には次のようなものがある。

日向駒（本朝武林原始）^{宇摩奈羅磨}。譬武伽能古馬（日本書紀推古帝記）日向ノ駒や駿駒也（日本記）又飛鳥時代に推古天皇の二十年春正月群臣を会して賜宴の砌、大臣蘇我馬子の奉つた寿歌に和し給うた御歌に次のようなものがある。

「馬蘇我よ、蘇我の子等は馬ならば日向の駒、太刀ならば、^其の^眞鋤、^宣しかも、蘇我の子等を大君の使はすらしき」と

日本における牛馬の祖先（神）は保食神^{うけもち}という。そしてその神蹟が都城市母智丘神社とされて、持丘、母智丘となった。持とは保食^{うけもち}の上の字を略したものといわれる。この神社往古より霊応著しく、三州では五穀牛馬の祈願が良くなされた。いかにこの三州の地が日本全国中産馬地であったか、その起因の久しいことを考察する事ができる。

鹿児島畜産史によると、神話になるが、「天祖勅あり天孫御牧を定め給う。高千穂峯の南麓なる襲国春山野に御牧を設け竜駿を養い玉いしと伝う。即ち（筆者註・一説では）曾於郡恒吉村須田木と市成村諏訪原とにまたがった地域である」と、

（註、天孫御牧の場所には異説もある。若し伝説通りだとすると大隅町恒吉と輝北町の産馬の古い事を物語るものである。）

二. 隼人の社会・文化

（一）隼人の社会

「神功紀」以後熊襲に関する記事が全く見られなくなり。その代わりに今迄見られなかった隼人の記事が出てくる。

隼人は古事記・日本書紀共に^{ほすりの}火闌降命（彦火火出見尊の兄）の後裔と伝え、新撰姓氏録も同様のことを載せて、之を天孫の部に収めている。弟彦火火出見尊は山幸彦で火闌降命は海幸彦で、火闌降命が弟

に屈服して「汝の俳優の民とならん」といった伝説によって早くから日本民族との関係を表すような風に考えられる。

隼人は本州人とは多少容貌・風俗・習慣・言語を異にし、上古には異種族と見做されていたらしい。吠ゆる犬に代りて朝廷に仕える事から隼人を別名狗人と称した。(狗奴国と符合) 尚犢鼻褌(六尺褌)を着け赭しやく(頬紅のようなもの)を掌及び面に塗り、延喜式に隼人司所属の隼人が白赤木綿の耳形鬘を着けていた事など今も台湾その他に赤色を好む風あつて参考になる。隼人の帯創の形頭権剣で、楯には頭に馬髪を編み着赤白土墨で鉤形を描いた。

我国では犢鼻褌は古来相撲の力士の用いるもので日本紀に雄略天皇受女を集めて衣裾を脱せて犢鼻を着けて相撲させられたとあり、相撲はもと隼人・東人等の主として行った技であるようである。天武天皇十一年隼人多く来て方物を貢し又その日大隅隼人・阿多隼人と朝廷に相撲い、大隅隼人が勝つたとある。持統天皇九年にも隼人の相撲を西の槻の下に見給うとある。

結局隼人は黒潮に乗って薩隅の南端に渡来した南方系のものであろうとの説もある。一説にはクメールと久米とこじつける安田徳太郎氏の説や、台湾の高砂族らと同一人種だという説もある。

唐書倭国伝に「邪古・波邪・多尼三小王」の波邪は隼人の事である。古くは阿多隼人と大隅隼人と出るが続日本記には大宝以後薩摩隼人の名が頻出している。

国造本記の景行天皇の隼人征伐の事は熊襲征伐の伝説と混同している。新撰姓氏録に額田部湯座連の条に其の祖先が允恭天皇の御代に薩摩国に遣わされて隼人を平げた事をのせてある。日本書紀に仁徳天皇皇子住吉仲皇子の近習の隼人刺領希さすなひ(古事記には隼人曾姿加里)の名が見え、仁徳天皇の頃に隼人は他の国と同様に舍人、帳内として朝廷に貢している。又日本書紀に雄略天皇崩御の時陵前に隼人昼夜哀号し食を与えたが食べないで七日目に死んだとある。

日本書紀清寧天皇四年、欽明天皇九年、及び齊明天皇元年の条に隼人が衆を率いて上京した。尚前述の通り天武天皇十一年七月隼人の相撲が行われた。日本書紀敏達天皇十四年八月天皇の殯庭防衛の事に隼人を当らせた。天武天皇十四年六月大隅直が忌寸姓を賜っている。在京の隼人も多く、犬養部、日下部、坂合部等の品部に編入されている。

このようにして大和の勢力はこの地方にも及んできたが、朝廷では地方で部民や私領を有した土豪たちを国造・県主として地方の支配組織の中に組み入れていった。国造は世襲されたため、やがて朝廷に対する身分の上下を示す姓の一種となるが、強大なものは大化の改新後の一郡あるいは一国を支配する場合もあった。国造には臣・連・君・公・あな等らの姓が与えられていたが、これらの官職は大化の改新およびその後の律令で廃止されたが郡司には国造を用いる規定があり、地方における勢力は相当に認められていたらしい。

1 日向の国造

本県のような所では、中央政府の施策もほとんど各豪族の自治に任せ、賦役のごときも上京の際、方物を奉る程度であつたと思われる。それは他地方に見られる朝廷直轄地である屯倉が一つもないことから察せられる。

日向国造。軽島豊明朝御世。豊国別皇子三世孫志男定二賜国造一。

豊国別皇子—加牟波良彦命(国富彦命)—老男命—○○—牛諸井(県主、諸県君)

伝説によると日向国造の祖は豊国別皇子である。その母は襲の国の住人^{みはしかしひめ}御刀媛であり、景行天皇の熊襲征伐に当り召して妃となし、生れた皇子という事になっている。

2 大隅の国造、豪族

大隅国造。纏向日代朝御世。治平隼人同祖郡小。仁徳帝代者伏布為日佐。賜国造。(先代旧事本紀・国造本紀)

この日佐は後に直と改めたようである。大隅の豪族として次のようなものがあつた。大隅直^{あたえ}(大隅国第一の名族である。大隅隼人の首領で、他の薩隅の豪族のすべてが君(公)姓であるのに、この氏が直姓を称しているのは、早くから中央と綿密な関係を結んだためと考えられる。大隅半島の古墳も大隅国造と深い関係があるであろう)

岐直(大隅郡岐郷によつた豪族)

加志^{かし}君(始羅郡の豪族)

佐須^す岐^き君(始羅郡の豪族である)

曾君(北部大隅第一の名族)

加志^{かし}公(隼人の首領)

はじめ大隅平原には大隅国造大隅直の一族があつてこの地方を支配し、北隅、贈於郡方面には曾君、或は桑原郡方面には加士岐君があつて夫々県主が之を支配していた。

(二) 隼人の古墳文化

1 古墳文化

西暦三世紀の中葉時代に東国はまだ皇威に服せず、統一国家の仲間に入っていないが西日本の大半は殆んど天皇を仰いでいた。

崇神天皇を日本書紀で御^{はつくにしらすすめらみこと}肇^{はつくにしらすすめらみこと}国^{はつくにしらすすめらみこと}天皇と記していることは興味深い。朝鮮の史書、魏志倭人伝等と照合し「書紀」の年代が実際の年に従えば崇神天皇時代を西暦三世紀代とすることができる。崇神天皇頃に統一国家ができあがったとすると古墳の発生と一致してくる。古墳を築き初められたのが崇神天皇であるといえよう。更に地方豪族が之を模倣し全国に広がった。

古墳時代には庶民の上に豪族があり、更にその上に貴族や大豪族がいた。貴族は皇族及びそれをかこむ人々つまり後にいう臣や連であり、大豪族は地方に住む者国史にいう国造や県主であり、百余国のクニの王などをいう。上層社会の人々は高床の家に住んでいたのであろう。この構造が後世の出雲大社の本殿のようなものにのこされる。

魏志倭人伝に「下戸、大人と道路に相逢えば逡巡して草に入り、辞を伝え事を説くには或は蹲り、あるいは跪き、両手は地に拠り、これが恭敬をなす」とある。これが弥生時代或は古墳時代初期の豪族と庶民との関係である。

村落国家でムラの首の「一人の意志」が強くその開墾耕作に当たる人々の土地所有権なく耕地全体がムラの首の所有であつた。弥生時代のムラの首も族長であり、ムラの民は家の子ではあるが、一面では

首に臣従するものであった。しかもその臣従の関係は弥生文化から古墳文化に進むにつれて、習性の上から強化され、やがてかの大化改新の詔にある「村首の有てる部曲^{ヌキベ}の民」となった。

古墳文化はむしろ一部の権威のある人々のものであり、一般民衆の生活や文化を表わすものではない。

竪穴にしか生活できなかつたものと、高床居住に生活したものとがあることを示すものである。貧富の差がはっきりと現われているのであり、このような貧しい人々の力によってこの文化がささえられているということである。

2 古墳文化の年代区分

農耕生産のすぐれた経済力を持った弥生文化社会を基礎にして古墳時代になっていくわけである。

古墳文化は漢籍にいう百余国という村落国家の中から大和国家が出て他を従え、統一国家として現われ、漸次その従えた百余の村落国家をおさえ、キミの地位を押し上げてクニノミヤツコやアガタヌシとし更にその中で才幹のあるものだけを郡の役人として国司の命を仰がせるようになった推移である。

大和国家のオオキミの命を仰ぎながらも尚村落国家のキミの勢を保持しておった時代を古墳文化の前期とすれば、すでにクニのキミとしての勢力を失い、オオキミの威圧の下にやっと地方政権の形を保っていた時代を後期としてよいし、その前期から後期への過渡の中間にあたる時代を中期とみる。それで大体古墳文化は三世紀のころから大化改新において薄葬令がだされたころまで続いた。

前期は畿内の古墳にくらべて地方のものが規模においてそう著しい見劣りのするものではなかつたらしい。とはいえそれは労働力を駆使して得られる外容の偉観だけであり、物質生活の豊かさをはかるバロメーターとなる副葬品においては畿内のものに劣るものがあったのは止むを得ない。前期は大体三世紀から四世紀中期頃迄とする。

中期は四世紀後半から五世紀後半までとし、中国の南朝特に呉との交通が開かれ中国文化の流入が著しい。横穴式石室とか方墳とか馬具とか、須恵器などがそれである。帰化人もこの後期に多く入って来たらしい。

後期は大体六世紀から七世紀までとし冠帽や耳飾、釧のようなものが整ってきたが、それは中国の制を受けたものが多い。この後期における中国文化が南朝のものを主とし、前期のものが魏などの北部中国のものと対比されるのは興味のあることである。

(参照・日本考古学講座5・古墳文化・河出書房)

3 隼人の古墳文化

(日向大隅の古墳分布)

日向の西都原の古墳群は三百数十基あり、三世紀後半即ち前期から中期・後期と古墳時代の全期にわたる円墳・前方後円墳・方墳・地下式古墳等あり、特に高十八米、全長二百十九米の男狭穂塚など有名である。

古事記によれば諸県君牛諸井の女髪長比売が美人のほまれ高く遂に応神天皇に召される事になった。この時皇太子の大雀命(後の仁徳天皇)がその美貌に思を寄せられ建内宿弥を通じて命に賜われるように

請願され遂に許されて命に賜わった。そして姫は仁徳天皇妃として二皇子を生された。その髪長姫出産の地といわれる都城市早水には円墳がのこっている。その髪長姫の兄大夷持命が三俣地方（高城、山之口、三股）に三俣連として君臨されたといわれ、高城町牧之原古墳群にその名残を遺していると思われる。大淀川に沿った山之口町富吉古墳群、都城市下水流古墳群、高城町石山、有水古墳群、高崎町縄瀬古墳群など分布している。高城町牧之原古墳群は中期頃と推察されるが、ほとんどが円墳で前方後円墳は三基で計十三基、石山有水まで加えると二十数基あり、小規模のものが多い。

大隅半島の西海岸に沿い高隅山地より、南走する丘陵地帯以東の平原、鹿屋、始良、高山、串良から大崎に及ぶ地方に古墳が多い。日向の串間に連なる現在失われたものも多いが現存する古墳で大なるものは塚崎、唐仁、横瀬の古墳群である。

塚崎古墳群は五十一基で、そのうち前方後円墳は八基といわれる。唐仁古墳群はさらに大きく、大塚（前方後円墳）を中心に、現在百三十二基を数えるといわれる。その中大塚古墳は後円部の高さ八間、頂上削平されて二畝歩ぐらい、縦経百間ぐらいで、周囲に濠をめぐらして、その幅はおよそ経十間ほどである。

横瀬古墳は唐仁町より六キロ位離れているが、前方部の経は約三十三間、くびれ経二十八間、後円部四十間、縦経六十五間に及び、前方部の高さ七間二尺（十三、三米）後円部八、三間（二五、五米）その大きさは本県最大で九州でも有数である。

これらの古墳文化は五世紀の後半、近畿地方の古墳文化が日向を経てこの大隅地域に直接はいつて来たものであるといわれている。このことは弥生式土器の分布によっても知られるようにこの大隅地方の社会的、経済的基盤が他の地域より優れていた事を意味する。

薩摩半島において川内地方に僅かに円墳が分布するだけでこれは大隅、薩摩の当時の地域差は大隅隼人が薩摩隼人より高い姓を得ていた事と対応してみると面白い。

尚これも大和朝廷の力が愈に末端まで侵透してくると大隅地方の豪族も次第に衰え、その発展が国分地方、川内地方へと移っていくのである。

私は、初代神武天皇の東征と日向の西都原の古墳群が全部で三百数十基あること、またそれらが古墳時代の全期に渡り作られているという内容から、神武天皇との繋がりがあのでは？。